

「桓野王」・梅逸・乾隆粉彩・etc.

三〇

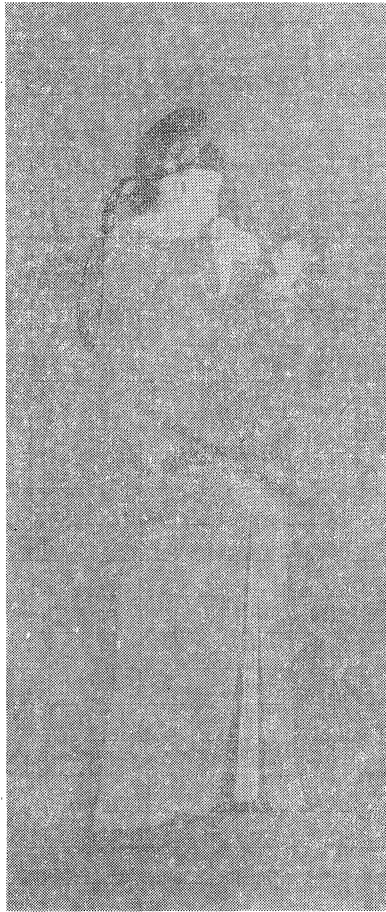
## 「桓野王」・梅逸・乾隆粉彩・etc.

加藤 一雄

錢舜拳の「桓野王」は現在××家に所蔵されているそうである。「そう」などと曖昧な言葉を使うのは、実は、私はまだこの名画を見ていないのである。そして将来も見er機会は恐らくもないであろう。錢舜拳、名は選、玉潭と号し、湖州霅川の人、宋ノ景定初年郷貢進士にあげられ、元ノ大徳七年六十余歳でその事蹟を絶っている。とする、この人は十三世紀後半を生きた人ということになり、宋・元一朝革命の混乱期に遭遇した人である。中野徹君に書抜いて貰った中国画論画家伝の多数は、この混乱期に生きざるを得なかった画家たちの姿を（多少曖昧ながら）描き出している。錢氏も勿論その一人である。至正二十三年元の世祖に召された呉興の名門趙子昂がこれに応じた頃から、画家文人の間に動揺が起るが、例えば、子昂の叔父の趙子固の如き、断じて異朝の像を食むことを拒否した。錢舜拳はどうもこの頑強な叔父さんの方の途を取ったらしい。「画史会要」によると「諸公皆相附取宦達、独舜拳齟齬不合、流連詩画以終其身」と伝えている。許謙の「白雲遺藁」では「嗜酒、酒不醉不能画、然絶醉不可画矣」と、ご尤も至極のことを云っている。酒は亡国の遺民の忘憂第一の具として珍らしくもないものの、「独舜拳齟齬不合」の一フレエズは甚だ綺麗ではあるが、私の寡見に入った限りでは、錢氏の絵にはどうも独り齟齬して合はぬ気味はな

い。「爾々白髮江南思、誰解箇中唱竹枝」という悲愁と嬋妍相交るの感は受取れないのである。むしろ、鞏韌な描線と沈んだ賦彩とは、この亡朝の醉民を以て、一個沈鬱な宋代古典人を思はせる節がある。錢氏の絵も数多かろうが、私のよくお目にかかるのは、高桐院の「牡丹図」と本法寺の「雞頭図」、そしてその他数点の草花虫魚の図である。

何れを取ってみても、金屬製の造花を氷柱に漬けたような強く冷い絵ばかりである。但し、もし強いて、時代の児たる錢氏の何ものかを感じよとならば、この水中の花をガスバアナーで焼くような一種切々の痛みを看取



錢 舜 拳 桓 野 王

できぬ訳ではない。ここの所は微か乍ら趙昌・李迪・毛益の諸公と異っている所かも知れない——まさに十三世紀末の烈しい焰が錢氏の絵に吹きつけているのであろう。曾て趙文敏は錢氏に向って「画道における士氣とは何ぞや」と尋ねたことがあるそうである。その時錢舜拳は唯一言「隸体のみ」と答えた。彼にしてみれば、季世の混乱も易世の苦痛も、これに耐えるにはただ隸体の精神しかなかったのであろう。隸体は秦代の遺習を離れて一五〇〇年、ここに始めて当代の生きた格律となる。思えば宋古典人の面目まさに躍如としたところであらう。曾て誰からだったか、漢民族文化の純粋性は宋を以て完璧の極に達し、その後はただ下降の一路を辿るのみ、と聞いたことがあるが、それな

らば、錢氏はまさに民族文化の劔ヶ峰に爪立っていたことになる。三五〇年の後、明朝は再び異民族清にとって替られる。易世は再びやってくるが、この時多くの画家たちはまたまた齟齬して合はず、詩画に流連することとなる。但し、その流連のしつぷりは、最早「隸体」ではなくて「草体」となっている。彼らは半ば文人半ば逸民となり、錢氏の古典的沈痛さはもう既にないのである。

わが国に錢舜拳の絵として伝えられるものは何点あるだろう。もとより淺識の私が悉知する筈もないが、私見に入るところでは、全て前述の隸体に属する絵のようである。どうもわれわれの祖父たちの鑑識には、錢氏を以てこのような人として見る一種の *préférence* があつたらしい。円山応拳がその好適例である。丹波出身の真面目者の彼は、より大きくより強く真面目な錢舜拳に、美学よりはむしろ倫理的に強く引きつけられたのであらう。無字と云はれる応拳と宋末古典人との対照は興味の深いものがある。そして更に七十年の後、応拳の遺鉢をつぐ森寛齋は東海の一小国の易世の混乱に遭遇する。その時寛齋の持っているものとは、野暮なほど真面目な資性と同じく真面目な画法しかないのである。彼はこの簡単な原理を固執して混乱の時世を生き抜いて行つた。思えば偉大な先師錢舜拳の歿後五六〇年、歴史は勿論繰返さぬが、命と云い数と云うものは、何かその精妙な指先を彼らの上に働かせているように思えて仕方がないのである。

頭記した通り錢氏の「桓野王」を私は見たことがないのだから、この絵の解説にはどうしても他人さまの文を借りて来なければならない。そこで、事はやや旧聞に属するが、大正七年「中央美術」四〇号にのった亡き木下杢太郎博士の印象記をそのまま拝借することにする。これでも現在世上に氾濫する甲乙人諸氏の解説文よりは余程マシな筈なのである。

「余の始めて見たのは大正四年十二月中国華社の展覽会に於てであつて、所謂桓野王の肖像である。丈約二尺許り

の長幅で、紅衣の一王が腰間に笛を帯び、且両手を屈げて不思議な指をして立つ側面全身像であつたが、其やや古びた狸臙脂めく衣裳の紅色は何とも言はず、殊に冠及び毛髪の快き墨と、顔面及び手指の胡粉と石帯と褐色の笛が全体に対して極めて好い諧調をなして、その色価と材料の物質とこそ違へ、宛として是れエラスケスであつた。立像の解剖的釣合までが支那離れしている。殊に両手の指のしなやかに婀娜つぱく、華奢つぱい写生は一度西域を通過して來れる技巧を考えないでは殆んど想像することが出来ないくらいである」。

文中 Velasquez への連想は大正初期という時代の、ややそのハイカラ文化臭のなすところであるが、桓野王の袍の紅色への讚美、全体に漲る不思議さと婀娜つばさ、そして西域通過の直覺は、この絵を実見した私の学友数輩もまたひとしく認めるところである。そして後述する理由によつて、私自身もまた李太郎さんの印象記を相当上等のものだと思つてゐる。

桓野王の逸事は「晋書」に詳しいそうであるが、あいにくこの種の格式のある書は家蔵にないので、今は略儀乍ら机辺にある有朋堂文庫の「世説新語」から引いておくことにする。王羲子の子の子猶が都にでる途次、清溪の渚下に泊してまだ発せざる時である。たまたま淮南ノ大守桓野王は堤上を通りかかった。兩人はもとより相識でなかつたので、子猶は人をやつて名を通ぜしめ、桓に乞うに一曲の笛を奏せむことを以てした。桓は高貴の身を顧みず車を下りて胡牀に踞し、子猶のために三調をなし、弄し終つてまた車に乗つて去つた、と言うのである。この間主客はついに一言も交えなかつたと。「世説新語」の編者はこの桓野王の風懷を以て「任誕」の章に入れている。けだし清爽な友情というくらいの意味であらうか。まことに画題としては品格高尚の画題であり、李太郎さんの伝える王の綺麗なポーズと相俟つて、宛としてここに東晋の一貴公子を髣髴させるに足りる——私はこれだけで既に充分万足なのであるが、世の中は好事魔多しで、実はこの絵については要らざる疑問がかなり纏綿するのである。

亡き師友野間清六君から曾て聞いたことであるが、実は東京博物館にはこの絵の模写が一本ある。筆者は狩野晴川養信だという。ところが、その模本の裏面貼付紙形に「宮女図、周文矩筆」とあるそうである。そして更に悪いことには、原本「桓野王」の左下に押した方形白文「錢選」の印はこれは明らかに偽刻と認められている。すると、この絵からはわが敬愛する筆者も、わが好尚の画題も、相共に湮滅するという結果になる。近代美術史家たちの緻密な研究は、ここ半世紀の間、頻りに私たちに幻滅を味はせて来たものである。この種の幻滅には慣れて、そして、諦めしか仕方があるまい。近代文化とは、けだし、そうしたもののなのである。しかしここにも一つの問題を錯綜させることがある。それは養信模本の裏面にはもう一枚貼紙があつて、それには探幽の印がおかれ、はっきりと「錢舜華筆、桓野王」と書かれているそうである。但し（但しである）この捺印も識記も到底探幽の手になるものとは認め難い、むしろ養信よりも更に後世の何者かの手になるものと思はれる——聞いている私は苛々せざるを得なかった。「一体どちらがほんとうなのだ。この絵の筆者は誰であり、画材は一体何なのだ。君自身の独自にして的確な意見を聞かせてほしい」「的確な意見など云えないよ」、と野間君憐れむが如く私に答えたものである。「学問の世界というものは、君の住む世界のように、そうシムブルには行かんのだ。まあまあこの絵は、錢舜華乃至は彼と同程度の優秀な画家が、恐らく北宋末期のある人物像を模写したものだろう。これでもかなり大胆な想像を交えた上の話なのだよ。何にせよ優秀な作には間違いなのだから、畢竟それでよいではないか」。こちらは少しもよくはなかったが、何分反論するには私の教養が余りに低いのだから、洩々々ら野間君の説を黙諾するにやむを得なかった。例えば、君はこの絵の題材が「桓野王」であるか「宮女」であるかを十分に明確にしていない。私は旧来の馴染みによつて「桓野王」であることを希うものだが、「宮女」なら宮女で、それもまた筋の通った綺麗な鑑識だとは思ふ。杜子美が「哀江頭」に歌う玄宗の鹵簿——

輦前才人帶弓箭　白馬嚙鬚黃金勒

のこの「才人」は宮女である筈だから、男装の女性は唐宋明清を通じ永い中国の歴史の精鍊された美意識であつたらしい。

昭和十一年冬のことである。私は京都絵画専門学校の休憩室で入江波光さんと雑談をしていた。座辺にはちやうど川崎男爵家の売立目録が来ていたので、話題はたしかその売立品目の美的及び経済的評価だつたと思う。評価など俤そうなことを言うが、波光さんはその道のベテランであり、私はズブの素人にすぎないから、話題はおのづからこちらが慎んで訓えを承はるという恰好であつた。その波光さんの訓えによると、今回の売立品目中の名品は第一が藤原期の観世音画像、第二が顔輝の「寒山拾得」、それからあの名高い銭氏の「桓野王」になると云うことだつた。私は氏の話題につれて目録のページを次々と繰って行つたが、「桓野王」の画面に到つてふっと手を止めた——「この絵なら私はよく知っています」。遅疑蹊巡を常態とする私の言葉としては、この決然と明瞭の語は実に珍らしく、波光さんも事の意外さにさぞ呆れたことだろうと思う。因にこの有名な売立はついに開かれなかつた——その当日がちやうど二・二六事件の起こつた日にあたつていたからである。かくして以後長く、恐らく永久に、私はこの名画を見失ふこととなる。

子供の頃育つた家の本箱をおいた中ノ間にいつも「桓野王」の軸がかかつていた。勿論模本である。亡き福田恵一氏の無名時代に氏がアルバイトとしてかいた模本のうち、文晁の「稚児文殊」とこの「桓野王」を私の家を買つたださうである。模写とは言い条、律気な福田さんは非常に精緻優秀な腕を示していた。だから私は幼い頃からこの不思議な絵には長い馴染みがある訳となる。桓野王の袍の色の見事な朱、烏紗帽に縫いとりしたデリケートな草花、石

帯の錆色をおびた緑——は李太郎博士の指摘を俟つまでもなく、子供心にも既に微かに看取し得たものである。正直にいつて、その後私の審美的能力は些かも向上していないと思う。この桓野王が男女両性の錯綜した一種の悩ましさを持つてゐることをまた看取した。後年書を読んで知ったところによれば Hermaphrodite のあの悩ましさである。子供というものは意外にも（或いは当然にも）古代人と相似た感覚を持つてゐるものらしい。家の女たちは私に向かつて、この高貴で不思議な肖像を「おぼげだよ」と教えていた。けれど、足がないからである。野間君の言によると「桓野王」は絵絹の上端と下端において殊に補修が甚だしく、恐らく主人公の足はいつの頃か切断されたのだろうという——この realism は勿論家の女たちも私も知ったことでなかったから、私は、殊に私は、「桓野王」を以て真底から幽霊化けものをかいたものだと思つていた。この思いは後年私をして、「剪燈新話」や「聊齋志異」、「伽婢子」や「雨月物語」の愛読者たることに誘つて行く。われ一己の美学史にとつて実に容易ならぬ悪影響を及ぼすのである。夜更け、厠にゆくため手燭を持つて中ノ間を通る時、蠟燭の光に浮かびでた桓野王の奇妙な指つき、朝になって、障子越しの薄い陽をうけて惑わしの醒めた彼の寂しい横顔は、子供心に刻印されたまま、今に到つてもなお忘れ得ないものとなっている。もし一個の芸術品に影響力というものがあるのなら、「桓野王」の私におけるそれは、まさにその最強の力を振つたものと言つてもあながち過言でないであらう。

旧制高校のわが親しい友、朽木惣左衛門の家は福井県大野郡打波川の上流にあつた。白山山麓の樹林に覆われた過疎地帯で、ここに惣左衛門は城館のような家を構えていた。早く父母を失つた彼は祖母と妹との三人暮らし、それに多勢の下男と少数の下婢とを交えた前近代的不変な家族構成をなしていた。この祖母なる人が私を、嫡孫にとつて、秀才の良友と誤認し、しばしば家に招待したのである。春夏の休暇にはよく出かけて行つた。惣左衛門は暮の名手であり、私はカラ下手であるものの、気分によつては好い勝負もするのである。朽木家の盤や石は驚くべく上等で、盤上

にパチリと石をおく感触は恰も玉盤上に露を置く感があった。この気分が私の手をあげるのである。二人は長い長い一日を、書院の縁側で泉水にはねる鯉の水音を聞きながら飽きずに碁を打っていた。彼の妹が、何が面白いのか、座辺にあつてじつと烏鷺の勝負を見ていたが、戦前の日々の経過は筆紙に尽くしがたくも緩慢だったものだ。「述異記」によると、むかし王質とよぶ木こりが山深く入ったところ、二人の若者が碁を打っているのに逢う。王質は彼らの一局の勝負を見物し終わって、さて里に帰ってみると、家族知人はすべて故人となり、彼の腰にさしていた斧の柄さえ既に腐っていたという。私は惣左衛門の妹の命短かったのは、どうもこの「述異記」を地で行ったような気がするのである。

この惣左衛門の家の書院の床に、ゆくりなくも、私は再び「桓野王」に邂逅することとなった。といっても実はさしたることはないのです、ある休暇に彼の家に行ったら、床ノ間にこの名画の模本が掛けていたというだけの話である。しかし由来「桓野王」は一己の私にとっては唯事ではすまない。しかも朽木家の「桓野王」は左向きなのである。私は美しさと懐しさと、それに一種の恐怖を交えて、ゾーッとした。フランネルのシャツの下が鳥肌立つのを覚えた。爾来私は「美は快感である」とするドイツ近世派の美学を惜気もなく放棄することになっている。美の極致とはもっとゾーッとする変な気持のものである。その晩、私は惣左衛門相手に酣酔し、「桓野王」に関するわが *histoire* を彼に聞かせてやった。わが友は嬰兒の如く柔かい心の持主で、海綿が水を吸うように私のバカ話でも吸い取ろうとするのである。「こんなち、もない絵が、そげえな名品の成れの果てとは、ナーモわしや知らんだがぞ」。彼の妹は、しかし、いつものとおり座辺にいて、チラチラと嘲けるように微笑していた。彼女は容顔殊に麗しく生まれついで来たものの、また生まれつき知能指数がかなり低いのである。彼女の朦朧とした精神に明滅する *idées* の数々は、悪意はもとより善意もなく、そのまま池面の小波のように、彼女の微笑として浮かびるのである。それを私



(並びに私程度のインテリゲンチヤども)は敢えて嘲笑として受け取るのである。省みて自己の精神内容に何らの自信もない証拠であろう。後年私らはいかに稠密にこの種の微笑の群に取り囲まれる仕儀となることか。右晒しても左顧しても誰かが私を嗤っているのである。惣左衛門の妹の嬋妍として明滅する微笑は、この意味では、わが知的複合劣等感の記念すべき濫觴であった。尤も、肝心のこの「桓野王」がその後どうなったかを私は知らない。惣左衛門もその妹も遠の昔孤墳一堆のあるじとなって、朽木家は亡びてしまい、従って、「桓野王」もまた杳として行衛は判らないのである。原本は幸いにして××家に秘蔵されているものの、わが忘れがたい「左向き」の「桓野王」は現代という荒涼とした風景の中に塵のように消えてしまった。

朽木家の客間や書院の床にかかっていたのは、「桓野王」はむしろ特殊なので、大抵の場合は別に見栄えもせぬ南画めいた花鳥や山水の軸がかかっていた。南画——現在の私はこのジャンルの絵には異常なほどの興味を示すが、四十年の昔には殆んど一顧だにも与えなかった。青春の悔いは誰人もひとしく抱くところであろうが、私にしても何故あの頃もっと南画を見ておかなかったのかと思う。南画なら私の育った場末町の環境にも沢山あったものを、そしてそれを画いた人びとの蕭条の逸話も祖父たちから聞いていたものを、何故か私はあれらの絵には完全に無関心であった。やっと南画に気づいた頃には、肝心の当方が老色日に面に上り歓情日に心を去る窮状となっている。老いて何の南画であろうか。あれらの絵こそ青春の唯中において見るべきものののだ。それでこそ春爛漫の花の影の、その影の艶やかな暗さがほんとうに解るものだろう、と思う。閑静な昼行燈の惣左衛門や、うすくて端睨すべからざる彼の妹が一体南画をどう思っていたのかは知らない。恐らく私同様何とも思っていなかったであろうが、こうして青春の歲月というものは私ら三人を空しく、実に空しく、押流して行ったのである。

朽木家のその南画の中にはかなり多くの山本梅逸の絵がまじっていたようである。「いたようである」とは頼りな

い言方であるが、当時私がこの天保の尾州の名匠を明らかに意識できた筈がない。惣左衛門の書院で私は行儀悪く寝転がり、ため塗の床框を枕にする癖があったから、おのずから頭上近く掛軸がくるということになる。その掛軸にたびたび梅逸亮の落款を読んだことを微かながら流石に覚えていたの

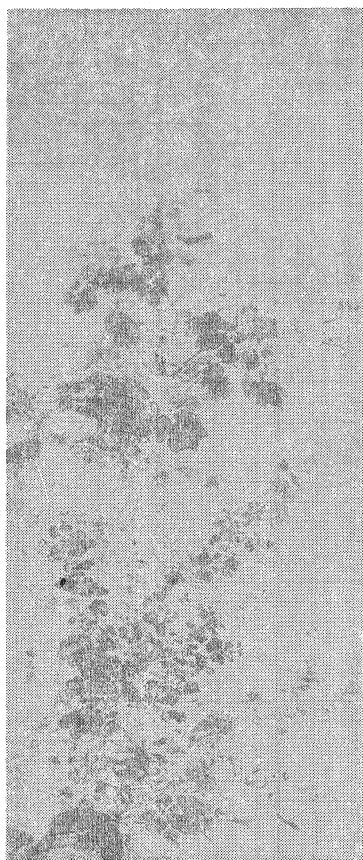
である。惣左衛門の亡き母は名古屋から嫁入ってきた人だったので、その嫁奩の中に数幅の梅逸を容れてきた。「梅逸なら加州にも評判がよいだろう」、という実家の父の慈愛によるものだそうである。尤も、尾州にせよ加州にせよ、なぜ評判がよいのか、当時の私にはさっぱり解らなかった。由来梅逸の絵は、作り物みたいな花園に同じく作り物みたいな鳥がとまっている。綺麗といえどもこれほど綺麗なものはないにせよ、凡そこの種の絵は私にとって平凡と退屈以外何ものをも意味するものではなかった。爾来四十年の歲月が流れている。今日では、梅逸の絵と聞けば老眼鏡にかけ直し、つくづくと眺めて幽邃静和の感興を味わっている——この心境は一体何だろう。尤も幽邃とは少し大袈裟で、私といえども別に梅逸を前にして高度の嘆賞・昂奮を味わっている訳ではない。謂わば凡人の凡慮のその極限に至っている感じなのである。唯その極限に一種いうべからざる安堵と静和の存するところ甚だ幽邃である。平俗の凡人が朝日に匂う山桜を見て、しかし、歌俳句までにはならぬ一種感嘆の情を発する、この情がまさに梅逸と私との



梅逸 芙蓉双鳩図

關係にそっくりなのである。

数年前の春、用事があつて山形県に行き、新庄の宿屋で通された部屋に見事な梅逸の花鳥画が掛っていた。春と夏の草木がかいてあつたから恐らく双幅の片われであろう。僻土に梅逸を見ることが、彼の天保安政頃の名声から推して、さして奇とするにも当たるまいが、私には私としてまた別に感をなす理由もある。少し余計に晩酌をとり、酔眼でつくづく眺め入った。四十年の昔、惣左衛門の書院であれほど看過黙殺した梅逸が何故これほど心に滲み入るのか。成程この四十年



梅逸 秋花草虫図



梅逸 柳蓮禽虫図

は変転驚くべき歲月ではあったが、省みてわれ一己の心はそれほど変わってもいないのである。むしろ世の変転を雲煙過眼して、わが心は青年の頃と同じように模糊薄明の境にありと思われる。その薄明の中に梅逸の絵が映ると、そこだけはつきりと嘆賞の影がつくのである。一体これは何だろう。年を食ったのだといえ、それはそれまでの話であるが、どうも單純に耄碌の老化現象とも思えない。四十年の世の変転は私の薄明の精神に、薄明ながら多少の影響は与えたのであろう。私の心は、愚かしも、悩んだり苛立つたりしたのであろう——つまり歴史である。そしてこの歴史の行きつく先が、結局、梅逸の冲和靜寧の世界であつた。二十歳の頃生意氣ざかりの眼で看過したあの惣左衛門の書院の幾点かの絵であつた。思つてここに到ると、どうも私は「天命」の語を口にせざるを得ない気がしてくる。「小人ハ天命ヲ知ラズ」と孔子はおっしゃるが、その小人の一人である私にすら「天命」を啓示してあやまたぬ梅逸の絵はまことに立派なものと言わねばなるまい。言つて同時に、また実に寂しい感じがしてくる。

この寂寥の感に促され、私は重い尻をあげて宿屋の帳場に出かけて行つた。折よく帳場に居合わせたその家の若いお内儀さんに向かい、あの梅逸の対幅を見せてくれと申し入れた。梅逸といい対幅という奇異な言葉にびっくりした彼女は、ただ当惑して襖の向うに入つて行つたが、暫くして篤実そうな老いた番頭が出てきた——しかしこの老人もまた同じく不審な顔をしていた。恐らく彼の長い番頭生活においても客室にかけた軸のことで文句をつけられた経験はないのであろう。けれども私の申入れの真意が解ると、彼も漸く笑顔をつくり、ほほ次のように返事をしてくれた。「あの絵はお客さま、てんから対も夫婦ツイミヨウもござりませぬ。亡くなった先代の主人が手焙をたんと買いました時、酒田の道具屋が序に持ってきた品でございます。あんな物でも何かあなた様のお眼に止まったところがあるのでございましょうか」——彼は心から不思議そうに、そして幾分かは申訳なさそうに、この変な客を見上げていた。私は惘然としてタバコを吹かしていたが、この惘然さはみるみる寂寞の感に移つて行くことをどうすることもできなかった。

話は元にもどって惣左衛門の書院に返るが、私が幾十度かよばれた朽木家の食膳において、当時の私を最も悦ばせたのはその豊富な分量であった。そして、現在の私をして最も愛惜憫恨の情に堪えざらしめるものはその食器類である。四ツ目結の家紋を蒔絵にした膳にのっていたあれらの食器類は、遠く回顧すれば、確かに古九谷であった筈だ。

後年私は博物館でしばしば古九谷の名品にお目にかかることとなるが、あの不思議に深い紫や緑の釉色は確かに見覚えがある。あれらの色の皿小鉢から惣左衛門のお祖母さんの手料理の松露や田楽や鵜を食ったのである。惣左衛門が盛んにやったから、これに倣って私もやったのだが、食器の皿を私はタバコの灰おとしに代用した。それらの一枚、唐子の刺った頭の上で吸ガラをつぶした——この唐子の可愛い顔を私は未だに覚えている。もしあの頃私が多少でも古九谷の何たるかを知っていたら、または少なくとも、朽木家の誰かが注意さえしてくれたら、わが生涯の美学史はもう少しましなものになっていただろうと思う。少なくとも現在のように、事陶磁器に関しては遠慮がちにおおずする必要は免れただろうに、と思う。私は世の陶磁専門の諸公よりは遙かに早く、感受性の鋭敏柔軟な頃に、既に古九谷を知ったのであるから。それも唯の知りようではない、食器兼灰皿としてそれを使ったのであるから。しか



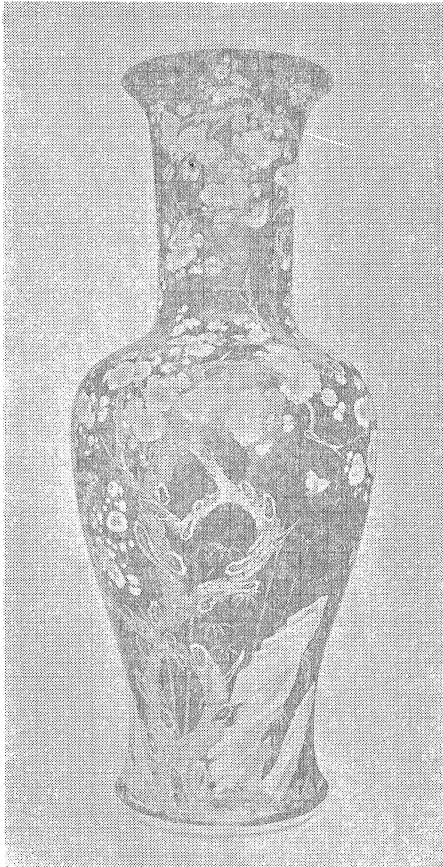
古九谷 色絵平皿

し、勿論朽木家の何びとも古九谷のコの字も私に教えてくれるものはなかった。全家屋が寂寞として叢林の中に埋もれていたように、全家族はまた恬然として所謂文化財に対して無関心の中に沈んでいたのである。私はこれらの静安をなつかしいものと思う。わが悔恨の念に、もし幾分かの愛惜が交っているとしたら、それは一にこの朽木家の、眠るような輕蔑するような、味然として高貴な *tranquillité* によるのである。

しかし、私が主として灰皿に用いたのはこれら古九谷の食器類ではなかった。惣左衛門の書院のため塗の床框を枕にする私の悪習は前に言ったが、この種の姿勢でおのずから手近にある灰皿は、脇床においてあった小型の花瓶ということになる。記憶はあまり正確でないが、何でも深い藍地に春爛漫の花鳥が一杯かいてある花瓶であった。濃艶・

纖艶・巧艶<sup>の</sup>の形容詞が、もしその姿色を描くなら、無限に続きそうな花瓶である。私はこの艶色無双の瓶の中へ次々と吸ガラを落しながら、飽きもせず惣左衛門と「世間話」に耽っていた。

二十すぎの青年にとって一体何事の「世間」であろうか。しかし実感として、当時私たちにとって「世間」なるものは無限の深さと可能性を秘めたまま、一つの大きな謎として現前してい

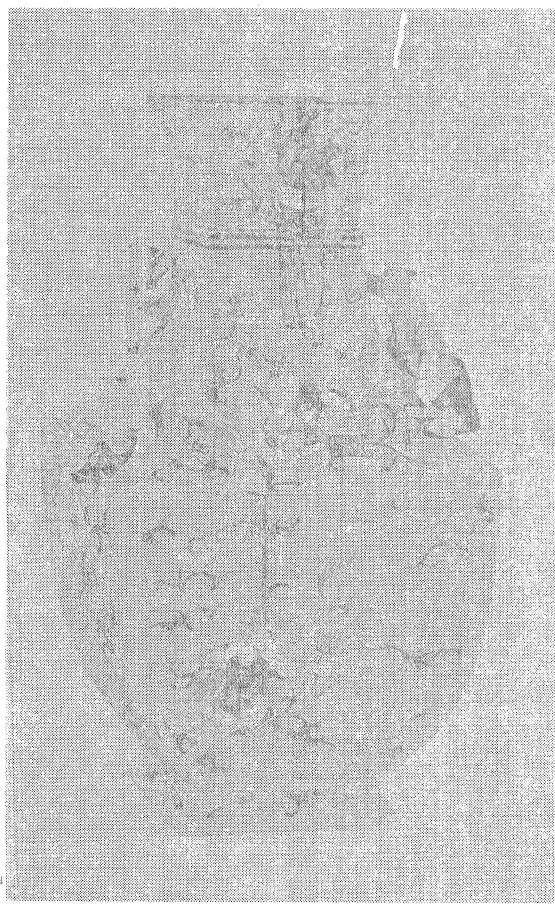


康熙官窯

た。従って、謎と時の話題は尽きるところを知らぬ訳である。庭にはときどき叫ぶように夜鳥が啼き、花々の暗香は衣を浸すばかりに漂っていた。ツルゲニエフ「獵人日記」の中の一齣のようでもあり、懷笑の「随聞記」の中の一行のようでもあった——「この夜、微月わづかに楼閣より漏りきたり、杜鵑しきりに鳴くといえども静間の夜なりき……」。しかも愚かな私たちは、無益な謎と時に夢中になっていて、四辺に澎湃とした大自然の美にも気づかず、つい頭の先にある、その中に吸ガラのいぶっている、人工巧態の極致の美にも全く気がつかなかったのである。

二十数年の後である。

ある日私は京都美術館の書庫で、棚から本を下ろし、いい加減に挿絵を見ているうち、思わずもふとページをくる指を止めざるを得なかった。これらのページに載っている陶器の写真はまさしく、昔惣左衛門の書院で見た春爛漫のあの花瓶と同類のものではないか。驚くというよりも、むしろ私は



乾隆粉彩

やや憂鬱げに、現にいま見ている本の表題を驗してみた——アルベール・モランセ社出版の Documents d'Art 叢書、Marguet de Vasselot という人がループルの所蔵品を紹介編纂しているらしい。いま見ている数ページ分の解説には何れも Ch'ien Lung period と出ている。私は平素窃かに自負している冷静さを失い、頗に血のさしてくるのを覚えた。二十数年の昔、失礼千万にも、あんなに粗末に扱った惣左衛門の書院の花瓶は、あれは清の乾隆の陶器であったのか、という訳である。近來私は清の文明にとりつかれ始めていた。讚嘆とか敬愛とかいうそんなノンキなものではない。況乎、研究論証などという高尚な仕儀ではさらさらない。文字通りとりつかれたので、事は狐につままれたのと同じである。但し、つままれたものの常として、自分自身では得々としているから、これでも天保の松崎謙堂から明治の鷗外漁史に至るわが国高級知識人の系列に入ったつもりでいたのである。現在に至って、狐はまだ完全に落ちているとはいいきれない。

この間京都博物館に行き、陶磁器の陳列室に入って、ただ何となく漫然と眺めていた。いくら漫然と見ても、宋代の磁器の棚はさすがに目を醒ますようなところがある。定窯の「白瓷輪花盤」・「柿天目小盃」、名高い吉州窯の「木ノ葉天目」・「蓼冷汁天目」と見て行くにつれて、成程、漢民族の美意識の純粹性とはこんなものかと泌々と思えてくる。その純粹性の中にさすが有情の翳りの微かに掃かれているところが得もいえず高尚である。隣りの陳列棚は清の部門になっているが、いつもよりは少々寂しい列品らしい。但し寂しくとも、清の狐はまだ私から落ちきっていないから、いつもの通り立ち止って一見した。雍正五彩の「列仙図盤」などかなり上等のものらしい。その時始めて気づいたのだが、折柄の日曜で、いつも閑散な博物館もさすがにかなり人がはいっている。その人たちの多くは唐宋の棚を見ている。殊にアメリカ人が熱心で、彼らの中でも細君連は一段と教養もあり熱意もあるらしく、宋磁を見ながら盛んにしゃべっている。亭主連は少なからず辟易の気味であるらしい。しかし、私の気づいたことには、こ



れら日本人や外人の全ては、宋磁に熱心な割りには、清の焼物には冷淡なことである。多くは清の棚を素通りして行くか、たまに歩を止めるにしても、まずは流眊して行く程度である——その状あたかも二十代の私にそっくりなのである。私は甚だ寂しい気がした。私は凡人の凡慮の路を歩いて、さてその終点としてやっと清に到着した。しかるに同じく凡人凡慮の彼ら小市民たちは、教養を積んだあげく、反って宋へ高翔している。そして私の着いた終点には寂として人影もないのである。これは一体どうしたことなのか。